

太宰府の文化財

401

鎌倉時代の道の跡 観世音寺一丁目

昨年(2019年)の2月に大宰府条坊跡(第3 17次)の発掘調査を行いました。この調査では、鎌倉時代の道の跡が見つかりました。今回はこの道の跡についてお話しします。

大宰府条坊は、大宰府政庁前からのびる朱雀大路(すざくおほじ)の東西に、碁盤の目状に土地が区画された都市遺跡です。朱雀大路の東側を左郭(さかく)西側を右郭(うかく)と呼び、東西方向の道を条路(じょうろ)と

南北方向の道を坊路と呼びます。調査を行った場所は、大宰府条坊の左郭6条4坊と5坊の区画にあたり、左郭4坊路の推定ラインにあたる場所です。

調査では4坊路推定ライン上で、南北方向にのびる道が見つかりました。写真1は鎌倉時代の道の調査途中の様子を撮ったものです。中央には路面と、その両脇には溝が見えま

す。路面は幅約1mほどで、硬く締まった土の面が広がっていました。さらに調査を進めると、硬く締まった路面の下には小石や土器・陶磁器の破片を敷き詰めた状態を確認しました(写真2参照)。これは路盤と考えられ、路面の下に小石などを敷き詰めることで、路面が崩れないように、また歩きやすいように工夫をしていたようです。

路面の両脇に見える溝は道の側溝です。溝はやや蛇行しながら道と並行しており、路面に水が溜まらないように、排水が行われていました。遺跡の南側には御笠川が流れており、水は溝を通じて御笠川に流れていったと考えられます。

この遺跡は11〜12世紀中頃の御笠川の氾濫で地盤が流され、古代後期から中世初期に復興された土地で、現場で発見された道は、少なくとも2回つくり直されていることがわかりました。道はつくり直されるたびに東に少しずつずれ、路面のつくり方や道幅が変わっていきました。また道は、かつてあった大宰府条坊跡の左郭4坊路を踏襲した位置と方向でつくられていることがわかりました。

文化財課 中村茂史



写真1 南北にのびる道と溝



写真2 路面の下に敷き詰められた小石

太宰府の文化財

402

天満宮周辺の条里

古代の大宰府には、「天下の大都」と記された街がありました。それは奈良や京都の都のように碁盤の目に整然と区割された街で、その痕跡は、なかなか気づきにくいのですが、今も街のいたるところに残っています。

大宰府政庁の前を通る東西道は、都へ向かう官道ともつながっており、街にとって重要な東西道路でした。この道は、今は市役所の前を通る県



道に引き継がれており、この道から、古代の条坊の街の東西幅をおよそ知ることができそうです。かつては、道の西端・関屋交差点付近が条坊の西端であり、また条坊の東端だった五条交差点は、今もほぼそのままに使われています。

今回紹介するのは、太宰府天満宮周辺の地割です。これは条坊の街の外側に広がっていた、古代の水田区画に由来する「条里」と呼ばれるものです。一辺約109mの地割で、正方形や平行四辺形の地割が道路や敷地境となっており、今も街並みのなかに残っています。

この条里は、五条交差点が起点となっています。地図上で五条交差点から東へ東西線をのびし、それから北側に109mずつ間隔をあけて平行線を引いてみると、これと一致する東西道路や区割が見つかります。これらは条里地割を引き継いでいると考えられ、発掘調査でも、これに沿った古い時代の溝などが見つかっています。おそらく、梅大路交差点から九州国立博物館の駐車場に向かう東西道路や、天満宮門前の店

が並ぶ参道は、条里の地割が起源となっていると考えてよいでしょう。

さて太宰府天満宮は、大宰府に左遷され903年に亡くなった菅原道真の墓所です。伝説によれば、亡骸を牛車で運んでいたところ、突然牛が動かなくなったため、これを道真公の思し召しとして亡骸をそこに埋葬した、それが太宰府天満宮の始まり、とされています。

実は、天満宮本殿の位置は、この条里の東西道が推定される場所と一致します。今はここに道路はありませんが、のちに門との関係で南へ少し移されたと推測すると、かつて牛車を通った道が地下に埋もれているかもしれません。その道は、この西方で、古代山城の大野城・太宰府口城門に至る登城路とつながっていたことも十分考えられそうです(太宰府市民遺産第3号「かつてあった道『四王寺山の太宰府町道』と一致する山道です」)。

条里は、太宰府の街のなかに息づいており、千年前の風景を今に伝えています。

文化財課 井上 信正

太宰府の文化財

403

史跡宝満山ほうまんざん 殺生禁断の碑せつしよう

本市北東にある筑紫野市との市境には、古来霊山として信仰の対象となつた宝満山（標高829m）が位置しています。福岡市近郊の手頃に登れる山として人気があり、登山者の数は九州でもトップクラスで、年間7万人を超えられています。この宝満山は、平成25年10月17日に国の史跡として指定されましたが、富士山、鳥海山ちようかいざんに続く全国でも例が少ない霊山としての指定でした。

そんな宝満山の山中には、古くから現在まで続く信仰の痕跡が多く残されています。その1つに、今回取り上げる「殺生禁断」の碑があります。この碑は花こう岩製で、太宰府側から山頂に至る登拝道の道際に立っており、ちょうど山の五合目に位置します。一の鳥居から登っていくと休堂やすみどうの先があり、碑の周辺は眺めが良く、太宰府方面を見ると眼下に四王寺山から博多湾まで一望できま



殺生禁断の碑

す。「生物の命を奪うことを禁じる」ことを意味するこの碑ですが、碑が立っている場所から上の領域では殺生を禁じていることを目に見える形で示し、仏教の教えに基づく「殺生禁断の結界」を表しています。

この碑は江戸時代にこの山で信仰された修験道しゆげんどうに関係するものと考え

られており、『山林式目』という文献によると、江戸時代の宝満山は山伏ぶつにより厳格に管理され、樹木伐採や狩猟についての細かなルールが定められていたようです。山頂付近の豊かなブナの自然林が残されているのも、山伏により守られてきた遺産のひとつです。そのおかげで、現在でも登山者がこの碑を見るたびに、

碑から山頂に向かう領域が霊山の聖地であることを知り、一木一草に至つても魂が宿っているため、むやみに命を奪うべきではないことを意識できます。

山頂付近のブナの自然林

平成30～31年度にかけて本市では、筑紫野市と共同で史跡宝満山の管理や保存活用のルールブックとなる保存活用計画を作成していきます。山伏をはじめとして多くの人が守ってきた宝満山を、両市で史跡として未来に向けて保存・活用できるように計画を策定していきたいと思ひます。

文化財課 高橋 学

太宰府の文化財

404

観世音寺の梵鐘

— 国宝・飛鳥時代 —

「…観音寺はただ鐘の声を聴く」と、901年からの約2年間を観世音寺から1kmほど離れた南館（今の榎社）で過ごした菅原道真が、漢詩「不出門」の中で詠んでいるのは、この観世音寺の梵鐘のことだといわれています。

この梵鐘は銅製の铸造によるもの

で、龍頭という吊り鑿部分には猛々しい双龍が、鐘身の上帯および下帯には肉太の忍冬唐草文、撞き座には新羅系瓦に似た蓮華文が施されています。撞き座の位置は古いものほど高い傾向があり、観世音寺の鐘は鐘身の五分の二ほどの高さにあり、奈良時代までの古鐘の中でも特に高

い位置にあります。

この梵鐘と「兄弟鐘」と言われる

銅鐘が、京都の妙心寺にあります。

二つの鐘は、龍頭の大きさや上帯・

下帯の唐草文に差異はありますが、

鐘身のサイズやプロポーション、撞

き座の位置や大きさ、上帯・中帯・

下帯の位置と幅などが一致してお

り、鐘身部が同じ挽形から作った鑄

型で製作されたものとされています。

妙心寺の鐘には、陽鑄された銘

文があり、それによると698年に

現在の糟屋郡で作られたものと分か

り、製作年が明らかな銅鐘としては

日本最古のものです。観世音寺の鐘

も妙心寺の鐘と近い時期に製作され

たと考えられており、さらには、龍

頭や上帯・下帯の唐草文の形態の違

いから、観世音寺の鐘の方がより古

いものとする見解が有力となっています。

妙心寺の鐘は引退し、現在は法堂

の中に安置されていますが、観世音

寺の鐘は今なお現役で、秋の太宰府

天満宮の神幸式大祭（通称「どんか

ん祭り」の際にはお下り・お上り

の儀で行列が観世音寺の南のどんか

ん道を通過する時に合わせて、鐘が

衝かれています。また、大晦日には

除夜の鐘が撞かれ、最後にご住職が

撞く鐘の音とともに新しい年を迎え

られます。太宰府のまちに響き渡る

この日本最古の鐘の音は、「残した

い」日本の音風景100選」に選

定されています。

観世音寺は、天智天皇が661年

に亡くなった母・斉明天皇の追善供

養のために発願した寺で、遅くと

も746年までには完成

し、法要が行われています。

この梵鐘は、7世紀

末頃に作られ観世音寺創

建期から今までを見守り、

そして往時に生きていた

人々が耳にした音を現代

の私たちにも聞かせてく

れる貴重な文化財です。

文化財課 遠藤 茜



観世音寺梵鐘（高さ159.5cm、口径86.4cm）
観世音寺所蔵、九州歴史資料館提供画像に加筆



除夜の鐘の様子

伝原山本堂跡出土の石塔と 原遺跡第27次調査の石組

連歌屋から三条には「原山」・「原八坊」(以下、原山とする)と呼ばれる、古代から中世にかけての山岳寺院が広がっていました。昭和45年、この原山の本堂跡と伝えられる土地で、工事中に地下約1mの場所で五輪塔や層塔などの石塔が数多く発見され、新聞で報道されました。今回は、発見された層塔(写真1)を紹介したいと思います。

三重もしくはそれ以上になる層塔は相輪や二層目の笠を失っています。各層の彫刻などは残りの良い状態でした。各層には「地藏菩薩」と「阿弥陀如来」が彫り出され、一番下の初層の仏の両脇には各仏に帰依することを示す「南無地藏菩薩」、「南無阿弥陀佛」と刻まれています。そして、初層と三層目の笠の軒の下には、角材を表した四角形の彫刻を二段に並べ、軒下の垂木を表現するなど、細かな彫刻が施されています。

このような特徴を持つ層塔は、県内ではほとんど見られず、佐賀県や熊本県で見られるため、筑後より南の地域の影響を受けて造られた物と考えられています。

昭和45年の石塔の発見から47年が経過した平成29年9月から平成30年7月に、層塔が発見された伝原山本堂跡の発掘調査を行いました。本堂と考えられる新旧2棟の礎石建物跡などとともに石組(写真2)が出土しました。この石組は、2棟の礎石建物と重複する位置に造られ、礎石建物が建てられていた時代の直後である14世紀代に造られたと考えられます。14世紀代に堂社がなくなった後も、この地が本堂の跡地であり、原山での信仰の中心地であることを



伝原山本堂跡位置図
(赤印が伝本堂跡)



写真1
伝原山本堂跡で発見された層塔



写真2 伝原山本堂跡の発掘調査で出土した石組

示すように、石組の上に層塔を始めとした石塔が建てられていたと考えられます。

昭和45年の新聞記事には、工事前に発掘調査を望む地元住民の声が強いことや、出土した石塔が住民の手により保存されていたことが書かれ、地元の人の支えによって原山の歴史が伝え残されてきたことが分かります。こうして守り伝えられてきた歴史が、昨年に実施した発掘調査の成果と結びつき、原山の歴史をひも解くことへとつながりました。

文化財課 沖田 正大

太宰府の文化財

406

土製仏像 原遺跡第22次調査出土 中世 三条一丁目

太宰府天満宮の西側にある浦之城橋を渡って四王寺山に向かう途中、連歌屋から三条一带に中世の寺院跡である原遺跡が広がっています。ここにはかつて、「原山」とよばれる山寺がありました。寺は通称「原八坊」と呼ばれており、八坊のほか本堂、中堂、宝塔院などが建っていたとされています。このうち、本堂が建っていたと推定される場所の一部で平成27年に発掘調査を行いました。



蓮華座

写真1 原遺跡第22次調査出土 土製仏像



蓮華座

写真2 (参考) 原遺跡第12次調査出土 土製仏像 (頭部欠損)

発掘調査では、寺院に関わる遺物がいくつか出土しました。写真1はそのうちのひとつである土製の仏像をかたどったものです。仏像は大半が失われており、全体像は分かりませんが、底面に花弁をかたどったものが見えます。これは仏の台座である蓮華座を表しています。その上の丸いふくらみは足を組んで座った状態を表しており、ちょうど左腿から膝の部分にあたります。このことから坐像であることが



写真3 原遺跡第22次調査全景 南東から撮影

わかります。また、中央に2本、膝のあたりを縦に走る浮き出た線が見えます。これは仏が身に着けている衣服の襷を表しているものと考えられます。中空になっている内側には、粘土を指で押し当てた痕がたくさんみられます。これは仏像の型に粘土を押し

し当てた際についたものです。外から見える場所ではないため、指の痕や粘土の継ぎ目がそのまま残っており、当時の製作方法を見ることができま

す。仏像は、懸仏(仏像または神像をかたどったもので、鏡から仏が浮かび上がる様子を表したものの。寺院や神社に奉納され、懸垂される)や、化仏(仏像の周りや光背に配置される小さな仏)の可能性が考えられます。

第22次調査では石敷きの道路跡(写真3)が山に向かって続いており、この土製仏像はここから見つかりました。そのほか、平成30年には原遺跡第27次調査として、西側隣地の本堂跡推定地中心部の発掘調査を行い、ここから土製仏像が見つかりました。当地近くで行った原遺跡第12次調査でも堂舎跡から土製の仏像(写真2)が出土していることから、道路跡で見つかった土製仏像は、本堂跡内で祀られた仏像群の一つであったと考えられます。

文化財課 中村 茂央

太宰府の文化財

407

宝満隠しと稲子地蔵

国分3丁目の県道112号線の国分寺信号近くにひっそりと祠があります。現在祠の周囲は宅地造成されていますが、昨年まで小さな丘がありました。この丘は、「宝満隠し」と言われていました。

宝満隠しについては、『太宰府旧蹟全図北図』（1806年）や『筑前国続風土記拾遺』（江戸後期）にも記録され、『筑前国続風土記拾遺』には「往還の東いささか田を隔て小高い丘あり。俗に宝満かくしといふ。

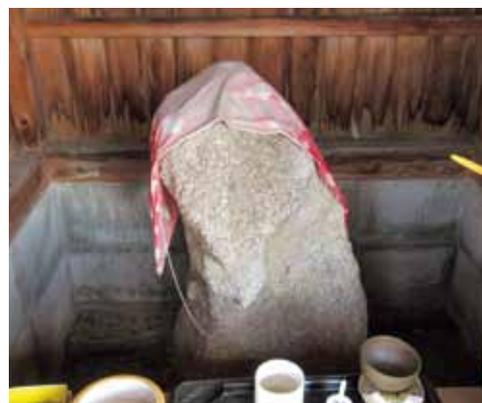
此丘の下の道をゆく程は宝満は高山なれとも稍此小丘にかくれて見えず。依て名づく。」と記されています。さらに地元では次のような

言い伝えが残されています。

「昔、二人の武士が水城のあたりに、宝満山を隠すような山があるかないかで言い争いました。その山がある」と言い張った武士が相手をここまで連れてくると、やはり宝満山は小さな丘にさえぎられて見えなくなりました。しかし、そんな山はない」と言った相手は、宝満山を隠すほどの高い山のことを言っていたので納得せず、またしても口論となり、ついには刀を抜いての果たし合いの末、二人とも命を落としてしまいました。土地の人たちは、二人を葬った場所に石碑を建て、そこを「宝満隠し」と呼ぶようになりました。」

『太宰府市史 民俗資料編』

また、宝満隠しの傍らにある祠の中には花こう岩の岩が祀られています。これは「稲子地蔵」と言われています。その由来は、「苜蓿の関守であった加藤左衛門尉繁氏の身代わりになって敵刃に倒れた侍女の稲子をお祀りしたもの」といわれ、『筑前国続風土記拾遺』にもそのように記されています。しかし、地元では



稲子地蔵

別の言い伝えも残されています。

「むかし、稲子という女性が、宝満山の山伏に恋をしました。しかし山伏の冷たい態度に悲観した稲子は、遂に身を投げて死にました。里の人々は、稲子の心情を哀れに思い、彼女の亡骸をせめて宝満山の見えない所、つまり宝満隠しに葬り、お祀りしました。」

『太宰府市史 民俗資料編』

現在「宝満隠し」は削られ、宝満山を隠すような丘は残っていませんが、昔話は残された稲子地蔵と共に後世に残ることでしよう。

文化財課 宮崎 亮一



「宝満隠し」がなくなり、遠くに見える宝満山。手前は稲子地蔵。



ありし日の宝満隠しの丘（2009年）

太宰府の文化財

408

大宰府「梅花の歌」と 大伴旅人の宅について



旅人の万葉歌碑

新たな元号に採用される「令」と「和」の文字は、万葉集の「梅花の歌」が典拠とされ、天平2(730)年の大宰府に赴任していた大宰帥(古代大宰府の長官)大伴旅人の館で行われた「梅花の宴」で歌われた32首の歌の序文の一節に、「初春の令月にして、気淑く風和らぎ」とあります。

「梅花の宴」は、奈良の都から大宰府や九州の国府に赴任した官僚や僧侶が集い、大宰府の長官であった大伴旅人の宅の庭で行われた観梅の宴のことで、正月(現在の2月)の春まだ早い大宰府での歌会は、梅花をたたえ、歌人自身の心情を織り込みつつ、天平の世の人々の心情をよく伝えていきます。後に万葉集の選者となる旅人の子である少年の大伴家持は、どのようにこの宴を感じていたのでしょうか。

この「梅花の宴」の舞台となった大伴旅人



月山東地区官衙跡



坂本八幡神社

の宅の場所はどこなのか。多くの研究者が言及しており、今のところの所在地の有力な説には大宰府政庁跡の北西にある坂本八幡神社の境内周辺、政庁跡の南東側にある月山東地区官衙、大宰府条坊跡内などがありません。

「梅花の宴」とは別の機会に旅人が詠んだ歌に

我が岡に さ雄鹿来鳴く 初秋の

花孺問ひに 来鳴くさ雄鹿

(万葉集巻八 一五四一番)

【訳】わが岡に雄鹿が来て鳴いている。初秋の花を妻として訪ねようと、来て鳴く雄鹿よ。

とあり、丘をひかえた場所であったことが知られています。今後、研究者を含め多くの方から注目が集まり、謎の旅人邸は太宰府のホットスポットになりそうです。

なお、この大伴旅人の万葉歌を刻んだ歌碑は坂本八幡神社で見ることができます。

文化財課 山村 信榮

太宰府の文化財

409

国分地区の条里

「令和」の新年号に代わり、はや一カ月。この元号は、天平二年（730）正月に大宰府の長官（大宰帥）大伴旅人が開いた「梅花の宴」に由来があり、大きな注目を集めました。この梅花の宴には、万葉歌人として有名な山上憶良も参加していました。彼は遣唐使の一員として唐に渡って学問を学び、紀男人（梅花の宴に出席した大宰府の次官）らと共に、皇太子時代の聖武天皇の教師も務めています。当時、筑前国の長官（筑前守）として赴任し、大伴旅人も深く交流したことが万葉集からうかがえます。

山上憶良が勤めた筑前国府の具体的な場所はわかっていません。ただ、奈良時代創建の筑前国分寺があること、筑前国で編成された軍団（御笠団・遠賀団）の印章出土地が近くにあること、また近年、筑前国内の戸籍などに関わる木簡や「天平

十一年」と書かれた木簡も発見されたことから、国府が国分地区に所在した可能性が高まっています。

さて、古代の水田区画に由来する「条里」について、昨年11月の本コーナーで天満宮周辺条里を取り上げましたが、一辺約109mという方形地割の痕跡は、この国分地区でも見ることが出来ます。また、筑前国分寺跡の約400m西側の発掘調査で見つかった筑前国分尼寺跡の中心南北線は周辺条里とほぼ一致しており、国分地区の条里の起源が奈良時代にさかのぼる可能性もあります。

ここで、発掘調査で見つかった筑前国分寺の南門前を東西にのびる道路跡に注目してみましよう。条里を構成する約10m幅の主要道路で、東はおそらく古代山城・大野城から下る道と接続し、国分寺前を通って、西は水城東門に向かう官道と接続し

ます。この東西道を起点に、地図上で南へ109mずつ間隔を開けて平行線を引いてみると、およそ6区画で大宰府政庁に至る東西道（刈萱関推定地付近）に至ります。条里は一辺6区画四方を一つの単位とするため（これを「里」といいます）、おそらく政庁前の東西道が起点となつて、国分地区の条里がつくられたことがうかがえます。政庁前の東西道が起点となるのは、天満宮周辺条里と同じであり、この道の重要性が想像できます。

この条里の中に筑前国府があった可能性はありますが、他地域の例では国府の施設と条里区画が合わない場合もあるようで、条里から国府の位置を特定することはできません。ただこの地区では古代の建物跡も少なからず見つかっていますので、将来、山上憶良が勤めた筑前国府や国司館などの主要な施設が明らかになるかもしれません。

文化財課 井上 信正



国分地区の条里の推定

太宰府の文化財

(410)

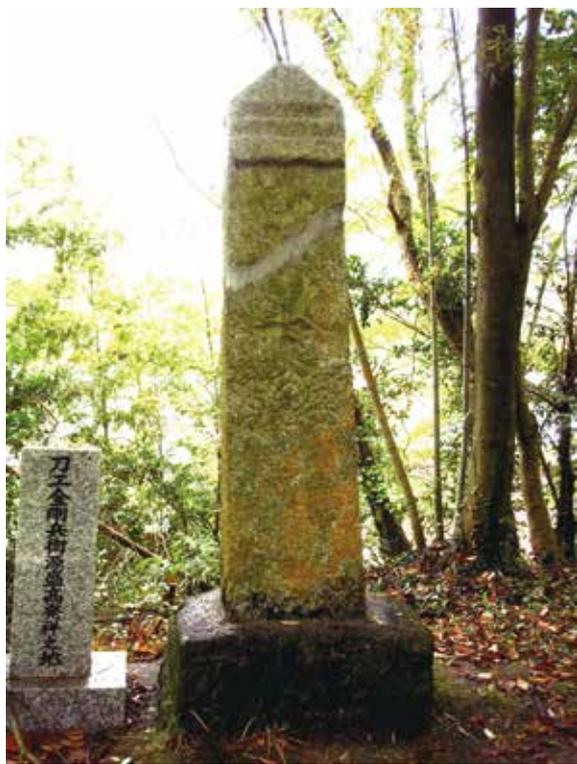
史跡宝満山周辺の石造物（板碑）

―伝金剛兵衛の墓―

鎌倉時代後期～南北朝

太宰府市の北東部にそびえる宝満山の山裾には竈門神社があります。竈門神社は近年、縁結びの神様として若い女性を中心に参拝者が増えており、その数は10万人にも届こうとしています。

さて、賑わう参道から少し外れて、式部稻荷社の西側にあたる小高い丘



に石造物がひっそりと集中している一角があります。今回はその石造物

群のなかの1つである板碑を紹介いたします。日あけ地藏堂に向かつて左裏にあるこの板碑は花こう岩でつくられた石製板碑です。残念なことに塔

身部分が折れたため、補修されています。台座からの高さ163cm、下部

最大幅38cm、最大厚30cm。頂部



は山形としてその下部に二重線と額部を設けるといふ、板碑の典型的な特徴を良く表しています。その下に縦長の塔身と基礎があり、塔身の平面上部に梵字の種字（文字）を配置しています。太宰府市周辺で、これだけの大きさでなおかつ、きちんと石の複数の面を整形加工して作られた板碑は少なく、貴重です。太宰府周辺の大多数の板碑は、自然石の形のまま、一面のみを整形して利用した長さ50cm以下の小さいものです。

この板碑の塔身には、蓮の花が表現された蓮座の上に不動明王の梵字の種字へ「カーン」が彫られています。蓮座もきちんと彫っており、堅くして加工が難しい花こう岩製の板碑としては丁寧な作と言えます。この種字を

カーンとみると、興味深いのはその種字の下部に休止符（ダ）がついていることです。これは、

本来は陀羅尼や真言といった文章の終わりを示す記号なのですが、種子の終わりにつく場合は、その仏・菩薩の功德を衆生に施与する意味を強く表したものとされています。不動明王は密教の本尊である大日如来の化身で、密教をはじめ、修験道でも信仰され、その功德は、治病・安産・災害の除去・怨敵調伏・財福を得るなどの多くの願いをかなえてくれるとされています。

また、この板碑は金剛兵衛の墓という言い伝えがあります。文献によると、金剛兵衛という刀鍛冶職人の一派は室町時代中期には全国的にも有名でした。ここ宝満山の山伏に出自を持つ鍛冶職人で、このあたりに住んでいたという伝承が残っています。金剛兵衛については改めてご紹介したいと思います。

さて、昨年度から史跡宝満山について本市と筑紫野市は共同で史跡の保存活用計画を作成しています。本年度で計画を策定し、それを元に史跡の保存活用を行っていきます。今後も宝満山やその周辺の文化財・文化遺産を紹介したいと思います。

文化財課 高橋 学